

『大和物語』第149段の〈語り〉と言説分析

— 散文叙述への意思と「歌徳譚」の決別あるいは『伊勢物語』第23段の脱構築 —

東原伸明

はじめに

従来、『伊勢物語』第23段と『大和物語』第149段は、「風吹けば沖つ白波たつた山夜半には君が独り越ゆらむ」の和歌を共有し、同じような物語内容を有する歌物語だというふう¹⁾に認識されてきた。しかし、評価において両者は段違いで、たとえば、片桐洋一は次のように評していた。

さきに、『伊勢物語』のこの話と『大和物語』のこの話を比較して第一に相違することとして、『大和』が、くどくどと饒舌に語りすぎる、説明がくどすぎるということを挙げたが、このように見ると、それだけの問題でないことがわかるはずである。金鏡に入れた水が嫉妬の炎で熱湯になったことをはじめとして、歌物語の中心になる「風吹けば」の歌と全く関連のないことが、『大和物語』に多く加わっていることを知る。また、併せて言えば、『伊勢物語』に比べて、『大和物語』には「みやび」とか情趣とかいう面が欠落して、ただストーリーをおもしろおかしく語ろうとする態度が前面に出ていると思う。『大和物語』の章段のすべてがそうだというわけではないが、『大和物語』は、このような点において、『伊勢物語』よりも、一段劣った作品だと私には思われるのである(2)。

(傍線は東原。以下、同じ。)

今日、一部の例外を除き(3)、片桐の『大和物語』に対する見方は大方の賛同を得てきたものではないかと推察される。ただし、片桐の分

析は、どのような叙述によってなされているのかという、言説の質や機能の分析を経てくだされた見解ではない。「くどくどと饒舌に語りすぎる、説明がくどすぎる」という意見は、「地の文」・「会話文」・「内話文」等々の言説を区別し、その機能を分析したうえで²⁾の発言ではない。印象批評以上のものではないことを、指摘しておきたい。

当該『大和物語』は、「地の文」・「会話文」・「内話文」・「移り詞」・「自由間接言説」、そして「和歌」等の言説で構成されている。言説分析とは、「何が語られているか」(物語内容)ではなくて、「どのように語られているのか」(物語言説)、それを説くことを主眼とする視座である。先走ったもの言いをしてしまえば、『伊勢物語』は、「何が語られているか」(物語内容)という次元でもある程度は説明できるだろうが、『大和物語』は、「どのように語られているか」(物語言説・表現)という視座を導入しなければ、その特性、文学的な達成を説明することはできないということである。

さらに、語る主体は、「地の文」・「会話文」・「内話文」・「移り詞」・「自由間接言説」、そして「和歌」等に分裂しているということである。

1 前提『伊勢物語』第23段の〈語り〉と言説分析

— 「空所」「空白」としての女の視点

手順として、『伊勢物語』第23段の要所を言説分析することで、検討してみること³⁾にしたい。

幼なじみの男女が、両親の反対を押し切ってまで結婚に突き進む。この前段に引き続き、『大和物語』とも共通の物語は、次のように語られている。

さて、年頃経る程に、女、親亡く、頼りなくなるままに、「諸共に、言ふ甲斐なくてあらむやは」とて、河内の国、高安の郡に、行き通ふ所出できにけり。然りけれど、この元の女、〈悪し〉と思へる気色も無くて、出し遣りければ、男、〈異心ありて、斯かるにやあらむ〉と思ひ疑ひて、前裁の中に隠れ居て、河内へ往ぬる顔にて見れば、この女、いとう化粧じて、うち眺めて、

風吹けば沖つ白浪たつた山夜半には君が独り越ゆらむ

と詠みけるを聞きて、〈限りなく愛し〉と思ひて、河内へも行かずなりにけり。

(伊勢物語 200頁) (4)

女の独詠「風吹けば…」を聞いた途端、嘘のように浮気の疑念は霧消し、男の心は女の許に戻ってしまう、典型的な「歌徳譚」である。歌の力によって、女は男の魂を引き止めたのだ。男の〈限りなく愛し〉と、「会話文」ではなく、「内話文」として表出されていることに、男の寡黙な佇まいにも、強固な意思が見てとれよう。

さて前掲の片桐洋一の評から再度引こう(5)、

あれほど相思相愛の仲だったはずの女を見限るのである。仮相の形で表されているにしても、今までの物語に描かれてきた挫折や破壊をいとわず愛に生きる男のタイプとは異なってしまっている。女の親が死んで生活の拠り所がなくなったから女を捨てる。自分の浮気を棚にあげて気持ちよく自分を送りだすのは、その後には何かやましいことをするのではないかと、こっそり植え込みの中から様子うかがう男。小さな男、つまらぬ男である。それに対して、女はりっぱである。献身的・犠牲的というのではなく、堂々と愛に生きていく。前掲の「井筒の恋」の部分に「さて、この隣の男のもとよりかくなむ」とあったのを思い出してほしい。物語は女を中心に語ら

れている。男は隣の男なのである。

しかし、この片桐の見解には、素直に首肯できない部分がある。片桐は、なぜ「女」を立派だなどと根拠の乏しい主張をするのだろうか。「堂々と愛に生きている」という女の姿は、いったいどこに描かれているというのだろうか。さらに「物語は女を中心に語られている」とも言うが、当該場面のどこにそんな立派な女の姿が中心に描かれているという、主張ができるのだろうか。

私が見たところ、当該場面は女の声を排除しているだろう。この場面の〈語り〉は、片桐によって「小さな男、つまらぬ男」と罵倒された、その男の一方的な視点・視線に寄り添って叙述がなされている。女の声は、「会話文」(直接言説・対話)も「内話文」(直接言説・独白)も、まったく排除されており、「風吹けば…」の独詠歌以外は、まったく叙述がなされていないのだ。だから聞き手は、そして読者は、この女が何を考えこんな行動に及んだのか、その真実を知ることができない。「あれほど相思相愛の仲だったはずの女を見限った男に対して、女がどう思っていたのかは、終に語られておらず、本文にはそれを見つけることはできない。「空所」であり、「空白」である。「空所」「空白」は、読み手の想像力によって充填されるしかない。片桐の「それに対して、女はりっぱである。献身的・犠牲的というのではなく、堂々と愛に生きている」という、本文のどこにもまったく記されていないという点において、不可解な解釈が成り立ってしまうのも、当該女の声が、封じられているからこそである。「会話文」による女の「建て前」も、「内話文」による女の「本音」も、共に封殺されてしまっており、叙述がなされていないからからこそ、そんな思い込みの主張もできるのではないのか(6)。

2 『伊勢物語』の脱構築としての『大和物語』と「内話文」に現

象する女の本音

昔、大和の国葛城の郡に住む男女ありけり。この女、顔容貌、いと清らなり。年頃思ひ交はして住むに、この女、いと悪くなりければ、思ひ煩ひて、限りなく思ひながら、妻を儲けてけり。この女の妻は、富みたる女になむありける。殊に思はねど、行けば、忌じう勞り、身の装束も、いと清らにせさせけり。

(大和物語405頁)(7)

『大和物語』第149段は、『伊勢物語』第23段のような前史を持たない。住居は都ではなく、「大和の国葛城の郡」という地方であり、これは『伊勢物語』と共通する。女の容貌について、「地の文」で「顔容貌、いと清らなり」と語っているように、「清ら」の語によって、物語の主人公としての性格が際立つ仕掛けとなっている。女の経済力に依存した生活をしていて、不如意になると、別に新しい「妻を儲け」るのだが、その女に対しては、「富みたる女」であることが結びついた最大の理由で、「殊に思はねど」と、「地の文」で語られているように、特に愛情を持っているわけではない。自分にとって欠損を補ってくれる、ありていに「都合の良い女」として、便利に交際しているに過ぎないのである。男の浮気のこんな合理的な理由は、『伊勢物語』ではまったく説かれていなかった。

ところで片桐洋一が、『大和物語』の生成に関して以下のように述べていることは傾聴に値する。

一見すれば、『伊勢物語』の場合と異なつて、大和の国葛城の郡に住む男女についての民間伝承のように見えるし、現にそのように説明している注釈書の類も多い。しかし、「この女、顔かたちいとき

よらなり」とか、この女を「かぎりなく思ひながら」とわざわざ説明していること、そして「このおんないとわるくなりければ」とか、「今の妻は、富みたる女になむありける」と説明しているのは、既に『伊勢物語』のような作品があつて、それによって説明を加えている感じであるし、「行けば、いみじういたはり、身の装束もいときよらにせさせけり」にしても、「この女、いとわるげにてあて、かくほかにありけれど、さらにねたげにも見えぬなどあれば」にしても、『伊勢物語』の叙述内容を過度に説明している感じである

(8)。

というように、要するに片桐洋一は、『大和物語』は『伊勢物語』の脱構築だと理解しているようであり、おそらくそうした見方は正しいだろう。脱構築とは、引用し差異化であり、『大和物語』は、『伊勢物語』を変奏することによって書かれているとも言えるのだ。

ただし、それを片桐洋一は、繰り返し「説明」という言葉を用い、『伊勢物語』の反復し縮小再生産だというふうには、マイナスに捉えているのは遺憾なことである。片桐が批判的に用いている「説明」ということは、次に出現する作り物語（その代表は『源氏物語』）や近現代の小説という散文学のジャンルにおいては、「描写」というタームに置換されるはずのものである。だから、それは片桐の理解とは逆に、拡大再生産として受けとめるべきであつて、私は『大和物語』の語りは、『源氏物語』的な言説に向けて、一步進化したかたちとしてプラスに評価したい。ここに記し、明確に指摘しておこう。

斯くにぎは、しき所に馴らひて、来たれば、この女、いと悪ろげにて居て、斯く外に歩けど、更に嫉げにも見えずなどあれば、へいとあはれと思ひけり。心地には、(限りなく嫉く心愛し)と思ふ

を「忍ぶるになむありける。」(留まりなむ)と思ふ夜も、(女)「なほ往ね」と言ひければ、(我斯く歩きするを嫉まで、異業するにやあらむ、然る業せずは恨むる事もありなむ)など、心の中に思ひけり。

(405～406頁)

二人だけでしんみりとするのは、久しぶりなことから、本来、今夜くらいは「(留まりなむ)と思ふ夜も、(女)「なほ往ね」と言ひければ」という叙述がなされているように、浮気をしてきた、後ろ暗い思いのある男にとって、渡りに舟のような女の言動は、あまりにも不審かつ不信で、そのままには、素直には受け止められないのだ。

そのように、当該文脈では「会話文」は体裁を繕うためだけに用いられているかのようであり、男も女も、相手には聞こえない「内話文」の多用し、重ね合わせることによって、互いの行動を付度しているのだ。そしてその中に、『伊勢物語』では「空所」「空白」となっていた女の心情、本音が、さりげなく、しかし、はっきりと、「心地には、(限りなく嫉く心憂し)と思ふを、忍ぶるになむありける」と叙述され、描写されていた。女は、明確に嫉妬していたのだ。

この本音には、新しい女に対する、むき出しの敵意が、嫉妬として現れ、それが、忌憚のない「会話文」ではなく、「内話文」として表出されているのだ。だから、この女の激情は「零記号」のように、「在る」のだが「無く」、「無い」にも関わらず「在る」のである。潜在して、水面下で現象しているのだ。

「内話文」(音声を伴わない独白、モノログ)としての表出なので、男には、女が発する声としては、まったく聞こえていない。平気な顔をしている女の、悲しい演技に騙されているのだが、状況的には不審感と不信感との狭間で、「この女、いと悪ろげにて居て、斯く外に歩けど、更

に嫉げにも見えず)などあれば、(いとあはれ)と思ひけり」と、明らかに浮気をしている自分に対して、それは長年夫婦を続けているから、勘として判ってしまう類のことであり、男の言動から女にはバレバレだろう、にもかかわらず「怒気」を顔に示さない女に対して、良心の呵責から。「健気な女」に申し訳ないと思ひ、心中また、(愛おしい)と思つていのである。まさに、注(6)の関根賢司が説くような、身勝手な男の心情に焦点化する、「都合のよい女」としての「貞女」の像である。

『大和物語』は、「内話文」を駆使することによって、女の心理を明確に描こうとする、強固な意思があると言えるだろう。それは確かに、片桐洋一が説くところの「説明」ではあるが、上記の分析を通過した時点で、果たしてこうした説明の何がマイナスだといえるのだろうか。もはや、これらの語り、叙述を、「くどい」などと、誰が感じるだろうか。

3 些末的叙述「使ふ人の前なりけるに言ひける」の解釈

さて、(出でて行く)と見えて、前裁の中に隠れて、(男や来る)と見れば、端に出で居て、月のいと忌みじう面白きに、頭搔い梳りなどして居り。夜更くるまで寝ず、いと甚ううち嘆きて眺めければ、(人待つなぬめり)と見るに、使ふ人の前なりけるに言ひける、

風吹けば沖つ白波たつた山夜半には君が独り越ゆらむ

と詠みければ、(我が上を思ふなりけり)と思ふに、いと愛しうなりぬ。この今の妻の家は、竜田山越えて行く道になむありける。

(407頁)

『大和物語』の女の「風吹けば…」の歌が「使ふ人の前なりけるに言ひける」と叙述されていることに対して、片桐洋一は次のように述べる。

朗詠ではなく、いわば口移的に伝えたことになっている。(…)

オペラやミュージカルのように、自然に向かつて朗々と歌い上げる

『伊勢物語』の登場人物の和歌のあり方が、『大和物語』では傍らに在る侍女に言うというように矮小化され、説明的になっているのである。

(前掲書、傍線―引用者)

『伊勢物語』は「歌徳譚」で収めようという意図から、「オペラやミュージカルのように、自然に向かつて朗々と歌い上げる」ように描くだろう。それは当然のこととして、『大和物語』のコンセプトは、歌で事を治めることではなくて、登場人物の女や男の心理を「内話文」等の言説を駆使し、散文の〈語り〉の機能と特性を活かして、むしろ『伊勢物語』的な非リアリズムを排しているのだ。だから、その典型である歌による事の解決、すなわち「歌徳譚」的な処理を否定し、それと決別しているのである。

したがって、片桐がここで説くように、「オペラやミュージカルのように、自然に向かつて朗々と歌い上げる」ように描く方向には向かうはずも無く、ありていにこの批判は、ないものねだりなのであり、的外れである。

また、「傍らに在る侍女に言う」ことは、果たして「矮小化され」ていることになるのだろうか。このシチュエーションは、『伊勢物語』とは異なる路線を選択した『大和物語』の書き手が、十分に考えて場面を設定したものであると思う。つまり、きわめて意図的である。なぜならば、垣間見をしている男は、「使ふ人」の存在に不審も違和も感じていた様子が無く、女の詠歌の内容に、一直線に「と詠みければ、（我

が上を思ふなりけり」と思ふに、いと愛しうなりぬ」と反応したと、叙述がなされているではないか。

してみると、この些末的な叙述に、それなりの意味を読み取ることも、無駄ではないと私は思う。そしておそらく片桐洋一は、当該『大和物語』のシチュエーションを、まったく理解していないのだろうし、またしようとも思っていない、どうでもよい、取るに足らない叙述だと考えていたことだろう。しかし、『大和物語』の書き手が、必然性からあえてそのように描いていたとすれば、その意図するところは何なのか？ここで、考察してみるだけの価値はあるはずである。少し想像力を働かせてみるならば、以下のようなことが言えるのではないだろうか。

まずこの女は、この家の「女主人」であつただろう。『伊勢物語』の脱構築を前提として読めば、家付きの娘だったと理解することもできる。だから、女主人としての矜持、プライドがあつたはずである。「旦那に浮気をされ、他所に女を作られた」などという話は、体裁の悪いことであり、周囲の誰に対しても、特に我が家で召し使っている使用人に対しては、特に「自分の弱み」となることであろうから、知られるわけには行かなかつたはずである。王朝的な価値観からすれば、「人笑はれ」的な状況だ。対面を潰されては、この先どの面下げて生きていけようか。だから、男に対してだけではなく、使用人にも「本音」を漏らすわけにはいかなかつたであろう。

「内話文」が利用され、「心地には、（限りなく嫉く心愛し）と思ふを、忍ぶるになむありける」とあつたように、他人には解らないように聞こえないように、愠気の感情を表出することはあつても、表立って男、旦那さんを責め、嫉妬の感情をむき出しにする訳にはいかなかつたということである。表面何事も無いように穏やかに振舞い、心中では相手の女に嫉妬するものの、我慢を重ね、ひたすら耐えていたというわけだ。

それではなぜ、「使ふ人の前なりけるに言ひける」なのか。

ここまでの私の説明に矛盾を感じるかもしれないが、そうではない。

「使ふ人」にもいろんな種類がある。彼女の前にいてもかまわない使用人。第一に考えられるのは、「乳母」か「乳母子」のような女房の存在である(9)。家付き娘のお目付け役と考えれば、彼女に対しては、「黒子」や「分身」的な存在であるかのように振舞い、四六時中いつも不即不離、彼女と一緒にいるのが当然の存在だ。居て当たり前、居なくては逆に不自然な存在と言えるだろう。「使う人」が、単なる使用人の一人ならば、体裁を繕う必要も出てくるだろうが、そうではなくて、乳母ならば彼女の悩みや本音を話すことができる唯一人の相談相手として、意味を有してくるだろう。

『大和物語』の書き手は、そんなイメージで、「使ふ人」ということばを使用していたとすれば、男が「使ふ人」の存在に一向に不審を抱いていないのも理解できよう。存外、「風吹けば……」の歌も、そうした女房の助言に拠って詠じたのだという、書き手の設定によるものなのかもしれない。案外いい線いっていると思うのだが、深読みに過ぎるだろうか。しかし、牽強付会ではなからうと思う。

さてそうした相手の前で、旅の旦那さんの無事を祈る呪歌を詠じるのに、「オペラやミュージカルのように」、「朗々と歌い上げる」訳はないだろうと、私は思うが。というよりも、他の使用人には知られては困る事情があるだろうから、大声で詠じるわけには行かないのだ。

片桐洋一は、恐らくそうしたシチュエーションなど、まったく想定していなかったにちがいない。

4 「歌徳譚」からの決別

—『源氏物語』的言説の先蹤としての『大和物語』の方法

ところで、『大和物語』の男は、『伊勢物語』の男のように女の歌に感化されてあつさり浮気の虫が治まったとは、語られない。

斯くて、なほ見をりければ、この女、うち泣きて、臥して、鏡に水を入れて、胸になむ据ゑたりける。奇し、如何にするにかあらむ)とて、なほ見る。然れば、この水、熱湯に滾りぬれば、湯棄てつ。又水を入る。見るに、いと愛しくて、走り出でて、(男)「如何なる心地し給へば、斯くはし給ふぞ」と言ひて、搔抱きてなむ寝にける。斯くて、他へも、更に行かで、集るにけり。(408頁)

歌の威力ではもはや男の感情に訴える限界があり、『大和物語』は、『伊勢物語』の「歌徳譚」ですべて事を収めるというワン・パターンに決別し、別のパフォーマンスの道として、(語り)、つまり、「地」で語ること、散文の機能の方を選択したのである。

これについても片桐洋一は前掲の引用において、

くどいと言いか言いがたないが、前半は『伊勢物語』第二十三段に、おいて語られて、女は、純粹な心と行動を適切に説明し直している。と見るべきだろう。また、後半の、金鏡に入れた水が女の瞋恚の炎によって熱湯になったという件は、『伊勢物語』第二十三段や『大和物語』のこの部分に描かれている女の、慎ましきや優しさの蔭に、このような瞋恚があったのだという、「実は……」という、まさしく異伝を説明する形が示されていて、『伊勢物語』第二十三段に先行する民間説話というよりも、『伊勢物語』第二十三段を前提にして、この話は「実はこうだったのだ」という形で異伝を披瀝しているのと見るべきかと思うのである。

「実は…」という「異伝」はしかし、プレテクストとしての『伊勢物語』の世界よりも、文学として話の中身が一層濃く、深まったと理解すべきではないだろうか。遺憾ながら『大和物語』の〈語り〉の方法の方が、散文としては『伊勢物語』よりも進化していると、もはや素直に認めるべきである(10)。

『大和物語』の男は、この女の、見方によってはグロテスクなパフォーマンスを、素直に「愛しく(いとおしく)」受けとめており、歌との「併せ技一本」とも言うべきかたちで、激情愛欲高まり、性交までしてしまっている。片桐は「くだい」と理解するが、もはや「くだい」などと認識できようか。これが散文叙述の技法なのであり、『伊勢物語』よりは進化した、『大和物語』の方法なのである。

5 理路に長けた『大和物語』の言説

女のパフォーマンスにより激情に走った男は、しかし、己のそれまでの行動、女性に対する配慮を、深刻に反省している。

斯くて、月日多く経て、思ひける様、〈連れ無き顔なれど、女の思ふ事、いと思みじき事なりけるを、斯く行かぬを、如何に思ふらむ〉と思ひ出でて、在りし女のがり行きたりけり。久しく行かざりければ、慎ましく立てりけり。さて垣間見ば、我にはよくて見えしかど、いと奇しき様なる衣を着て、大櫛を面櫛に挿し掛けて居りて、手づから飯盛りをりけり。〈いと思みじ〉と思ひて、来にけるまゝに、行かずなりにけり。

この男は王なりけり。

(411頁)

この『大和物語』の言説に相当する部分を、プレテクストである『伊勢物語』は、どう語っていたであろうか。

風吹けば沖つ白浪たつた山夜半には君が独り越ゆらむ
と詠みけるを聞きて、〈限りなく愛し〉と思ひて、河内へも行かずなりにけり。

(200頁)

まれくかの高安に来て見れば、：

(208頁)

『伊勢物語』第23段は「歌徳譚」で決着が図られていたはずである。ところが、女の独詠によって翻意したはずの男が、一度は「河内へも行かずなりにけり」と語られていたにもかかわらず、その舌の根も乾かないうちに、次節では、「まれまれかの高安に来て見れば、…」と、男はまた、新しい女の所に来てしまっているのだ。これは、男のどんな心理からなのだろうか、と訝しむ。

このような『伊勢物語』の構成のまずさを、前掲の引用において片桐洋一は以下のように述べている。

「風吹けば…ひとりこゆらん」と詠んだ女の歌に感じ入った男が「かぎりなくかなしと思ひて、河内へも行かずなりにけり」で、達成されたはずである。しかし「河内へも行かずなりにけり」と言い切つておきながら、すぐに「まれくかの高安に来て見れば、…」と続け、男が「心うがりて、行かずな」った理由を開陳する。しかも、「心うがりて、行かずなりにけり」で終わっていればよいのだが、「さりければ、かの女」が大和の方を見やりて、「君があたり…」という歌をよんだというのは、これでもか、これでもかとくだい。さらに「大和人」が「来む」と言つて来たので、喜んで待つていたが、「たびたび過ぎぬれば」、「君こむと言ひし夜ごとに過ぎぬれば…」

という歌をよんだと記した後、結局、男はやって来なかったと物語の最終結果を述べて終わっている。つまり、この女が男に見放される顛末、これでもか、これでもかと書かれていて、この高安の女が徹底的に見放されるという書き方になっているのである。

この片桐の説明で、『伊勢物語』の読者は果たして納得したかどうか。それはともかくとして、『伊勢物語』の言説も、片桐によれば「くどい」ということになってしまふから、始末に困る。そうだからだであろう、『大和物語』はその反省の下に、『伊勢物語』をリライトしたのではないのか。

そもそも『大和物語』の男が浮気、つまり新しい女を作った動機は、
(元ノ女ヲ) 限りなく思ひながら、妻を儲けてけり。この今の妻は、富みたる女になむありける。殊に思はねど、…

と叙述されており、元の女を愛しながら、窮乏したのでパトロンとして新しい女を見つけその経済力に依存してみたが、彼女への格別な気持はなかったと、はっきり語られている。男の風上にもおけない、酷い奴であつたことが判る。

ところが、当該事件を経験したことで、この男は大いに反省をしたのであろう。男があたらしい女を再度尋ねた理由は、言説から明確に読み取ることができる。

「斯くて、月日多く経て、思ひける様…」と叙述されているように、月日を経て長い時間と期間が経過するとともに、今まで女を食い物にしてきたことを屁とも思わなかった男の中に、衝撃的な経験が契機となつて新たに反省する気持が芽生え出した。それがやがて成長するにしたが

って、四方に枝を延ばし出すと、男自身、二人の女たちにしてきた仕打ちを、冷静に眺められるようになり、やがて自責の念が飽和状態になつてしまったのだらう。ここに居る女は自分の行動を怒るでもなく、愚痴をこぼすでもなく、表面は穏やかに平気な顔をして生活してきた。だが、きつと内心では実にはたいへんな思いをしていたのだらうと、「内話文」を用いて男が付度する様子を『大和物語』は叙述している。『伊勢物語』とは異なり、『大和物語』は女の心理の描写も男の心理のそれも、「心の声」、「真実の叫び」の表出である「内話文」を用いることで、この男の真実、真心を綴ることに成功していると言えるだろう。

またそれが動機となつて、同様に何を考えているか解らないもう一人の女に対して、男は申し訳ないと思つてしまふのである。

それはこの部分の言説が、夙に塚原鉄雄の説く「鎖型の構文」(11)の発想のように、二重傍線部分のことが「繋ぎの鎖の輪」となつて、元の女の場合と新しい女の場合とに、重層的に掛かつて行くと理解できるからである。

思ひける様、(連れ無き顔なれど、女の思ふ事、いと忌みじき事なりけるを、斯く行かぬを、如何に思ふらむ)と思ひ出でて、…

すなわち「内話文」の一部、(連れ無き顔なれど、女の思ふ事、いと忌みじき事なりけるを、…)は、まず元の女との一件を想起させるものである、それと同時に重層的に、以下の新しい女にも当て嵌まる事象である。だから、今度は新しい女の近況を気にすることになるのだ。何しろ、衝撃的な垣間見の経験をしたことよつて元の鞘に収まってしまう。結果的にあたらしい女を長い間、放つばらかしてしまったのだから。果たしてあの女はどう思っていることか…。金銭的に都合が良い女とし

て扱ってきたことに対する、男の反省が綴られている。男の、心の成長を語っていると読んでもいいだろう。『伊勢物語』の叙述ではそれはできない、『大和物語』の散文による、一つの達成である。

さて、そんな殊勝な動機でやってきたものの、敷居が高くて家には入られず、結果的に垣間見をすることになる。垣間見は、結局、覗き見だ。しかし、この覗き見は、男に金満な女の正体を暴露する結果をもたらす。とどめとして記されている「この男は王なりけり」の一文は、確かに、いかにも取って付けたという印象がする。しかし、これが付加されていることによって、この男が「斜陽」の皇族の末裔であり、正体を覗き見られた方の女は、品の無い新興の「成金」であったことが、明確になるのである。

要するに落ちぶれても、元は皇族の血筋であったからこそ、この女の直截で下品な行為にどうにも我慢がならず許せなかったのだと。だから男が一方的に女と手を切っても仕方がなかったと、読者が納得できる理由を最後にでっちあげるためにも、「王なりけり」と騙った（↓語った）のである。

この大事な一点が、十分には理解されていないように感じる。「この男は王なりけり」という一文の付加について、『伊勢物語』の業平章段を意識しているか、いないかという議論をする以前に、男がこの女を見限らざる得ない条件として、何としても最後に付加する必要性があったという事実を忘却してはならないのだ。従来の見方は、業平章段との関わりを説くことにあまりに性急で、対読者意識という点において、言説の十分な精読と吟味がなされていなかったのではなからうか。

以上の論述から、『大和物語』第149段は、『伊勢物語』第23段を脱構築することで、新たに散文叙述の語りの方法を開拓したものだと言え、また『源氏物語』の散文的な言説に、一歩近づいたものであることを検証

しえたものと思う。

注

(1) 「風吹けば沖つ白波たつた山夜半にや君が独り越ゆらむ」の和歌は、『古今和歌集』卷十八雑歌下994番「題しらずよみ人しらず」の左注が共通。後掲注(6)の片桐洋一論稿によれば、通説を否定する片桐は『古今集』の左注は、『古今集』の成立時からあったものではなく、『古今集』が成立して一〇〇年ほど経った西暦一〇〇〇年頃に『伊勢物語』第二十三段を資料にしながらまとめて付加したものである(詳細は片桐洋一『古今和歌集以後』(二〇〇〇年、笠間書院刊)参照。)とする。小稿は、当該片桐説を支持する立場である。

(2) 片桐洋一「井筒にかけし(二三段)」(片桐洋一編『鑑賞日本古典文学 第5巻 伊勢物語大和物語』角川書店、一九七五年)。

(3) 山口仲美「大和物語——歌物語から説話文学へ」『日本語の古典』岩波新書、二〇一一年。

(4) 『伊勢物語』の本文の引用は、片桐洋一『伊勢物語全読解』掲載本文(天福本)に、適宜漢字を宛て、「会話文」には鉤括弧「」を付し、「内話文」には山型括弧()を付すなど、私に加工を施してある。

(5) 注(2)の片桐洋一の論稿。

(6) 例えば松尾聰は、「もとの女は何もいわない。いゝたくてもいえないのである。自分は新鮮味はすでに微塵もない古女房である。親はすでないひとりぼっちの女である。しかも、あゝ、自分は男を愛している。何物にもかえがたく愛している。我慢しよう。あの方が、こうしてあの方が、こうしてこゝにわたしと一緒に住んでいくのださることだけに、せめて自分の小さな幸福を見つめていよう、女はこう考

えきめている。女はつとめて明るくいそいとふるまう」(『伊勢物語』アテネ文庫・弘文堂、一九五五年)と読んでいた。

また片桐洋一は、『伊勢物語』第二十三段において語られている「粋な心と行動」と捉えており、その本質を「慎ましさを優しさ」と理解しているようである(『研究と評論』『伊勢物語全読解』和泉書院、二〇一三年。207頁)。

さらに関根賢司の読みは、以下のとおり。曰く、「男は、いつだって意志薄弱で、疑い深いと思慮が浅く、傷つきやすい繊細な魂をもてあましているだけの日和見主義者で、主体性に乏しい。だから、女にも別の新しい男が出来たのではないかと疑って「前栽のなかに隠れて」河内の新しい女のもとに出かけたふりをして見ているのだ。

(…)男を信じて疑わず、あくまでも待ち続ける女の、従順で無私な愛情が、再び男の心を打ち、捉えたのだ。蘇った夫婦の絆は、たぶん生活の不如意をなんとか乗りこえていくであろう。自分を裏切った男を、しかし怨まず、かえって思いやり案ずる女。いかにも一般大衆に、いや過去の(ひよっとしたら現代の)につぼんの身勝手な男どもにとつて、うれしくもありがたい貞女の美談ではあった、あるいは「無私の愛情」と理解しているようである(『化粧 第二三段』『伊勢物語論 異化/脱構築』おうふう、二〇〇五年)。

(7)『大和物語』本文の引用は、柿本奨『大和物語注釈と研究』武蔵野書院、一九八一年による。適宜漢字を宛て、「会話文」には鉤括弧「」を、「内話文」には山形括弧を施すなど、私に加工している。

なお、柿本引用本文の底本は、為家本『大和物語』(「尊経閣叢刊」複製)。また異本の、藤原親長本・天福本・桂宮本は、「心憂し」と「心憂く」とする。異本の本文に従えば、直接言説の「内話文」ではなく、間接言説の「地の文」となるが、いずれにしても、『大和物語』

は、女の心を相手任せにせず、明確に描いて見せてくれているのである。

(8)注(4)片桐の著書、『研究と評論』『伊勢物語全読解』206頁。

(9)ここでは例えば、『源氏物語』「末摘花」・「蓬生」巻に登場する末摘花の乳母子、侍従の君のような人物を、イメージしてみたらどうであろうか。なお、「乳母」・「乳母子」に関しては、吉海直人『源氏物語の乳母学—乳母のいる風景を読む—』世界思想社、二〇〇八年を参照。

(10)この片桐洋一の見解に先行して、今井源衛(「百四十九段【余説】」『大和物語評釈 下』笠間注釈叢刊、二〇〇〇年)は、女の嫉妬の感情が、胸に押し当てた鈍の水を即座に沸騰させる奇想な描写の発想を、和歌世界の「思ひ」に「火」を懸けるそれ一般に求め、「胸の思ひで鈍の水がたぎるという着想も、こうした歌語としての用法に馴染んでいた人々にとつては必ずしも、それほど奇矯不趣味なものとも思われなかったであろう。むしろ、「思ひ」の文字を表面に出さずに、鈍の水を以てそれをしたたかに示したところに、『大和物語』の作者の腕の見せどころがあったのではなからうか」と評していた。

(11)塚原鉄雄「鎖型の構文」『国語構文の成立機構』新典社、二〇〇二年。初出、一九五六年。